

中之島の火山活動解説資料（令和8年5月）

福岡管区气象台
地域火山監視・警報センター
鹿児島地方气象台

火山活動に特段の変化はなく静穏に経過しており、噴火の兆候は認められません。
噴火予報（活火山であることに留意）の予報事項に変更はありません。

○ 活動概況

・噴煙など表面現象の状況（図1、図2-①③）

御岳^{おたけ}火口では、白色の噴煙が最高で火口縁上300m（4月：80m）まで上がりました。御岳火口内斜面では、引き続き複数箇所^{おたけ}で白色の噴煙を確認しました。また、火口底には水溜まりを確認しました。

・地震や微動の発生状況（図3）

広域地震観測網において、島内に震源が求まった火山性地震はありませんでした。長期的には御岳山体付近が震源と考えられる地震が時々発生しています。

・地殻変動の状況（図4）

GNSS連続観測では、火山活動によると考えられる特段の変化は認められませんでした。

・火山ガスの状況（図2-②④）

東京大学大学院理学研究科、京都大学防災研究所、十島村及び気象庁が実施した観測では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、今期間、観測値を得られませんでした（4月：40トン）。

この火山活動解説資料は気象庁ホームページでも閲覧することができます。

https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php

次回の火山活動解説資料（令和8年6月分）は令和8年7月8日に発表する予定です。

資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/kazan/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土地理院、京都大学、東京大学、鹿児島大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、十島村及び公益財団法人地震予知総合研究振興会のデータも利用して作成しています。

資料の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図50mメッシュ（標高）』を使用しています。



図 1-1 中之島 御岳の状況（5月6日、寄木監視カメラ）

御岳火口では、白色の噴煙が最高で火口縁上 300m（4月：80m）まで上がりました。



図 1-2 中之島 御岳火口内の状況（左：5月24日、右：4月20日 御岳山頂監視カメラ）

御岳火口内斜面では、引き続き複数箇所では白色の噴煙を確認しました。また、火口底には水溜まりを確認しました。

御岳山頂監視カメラは、2026年3月26日より運用開始しています。

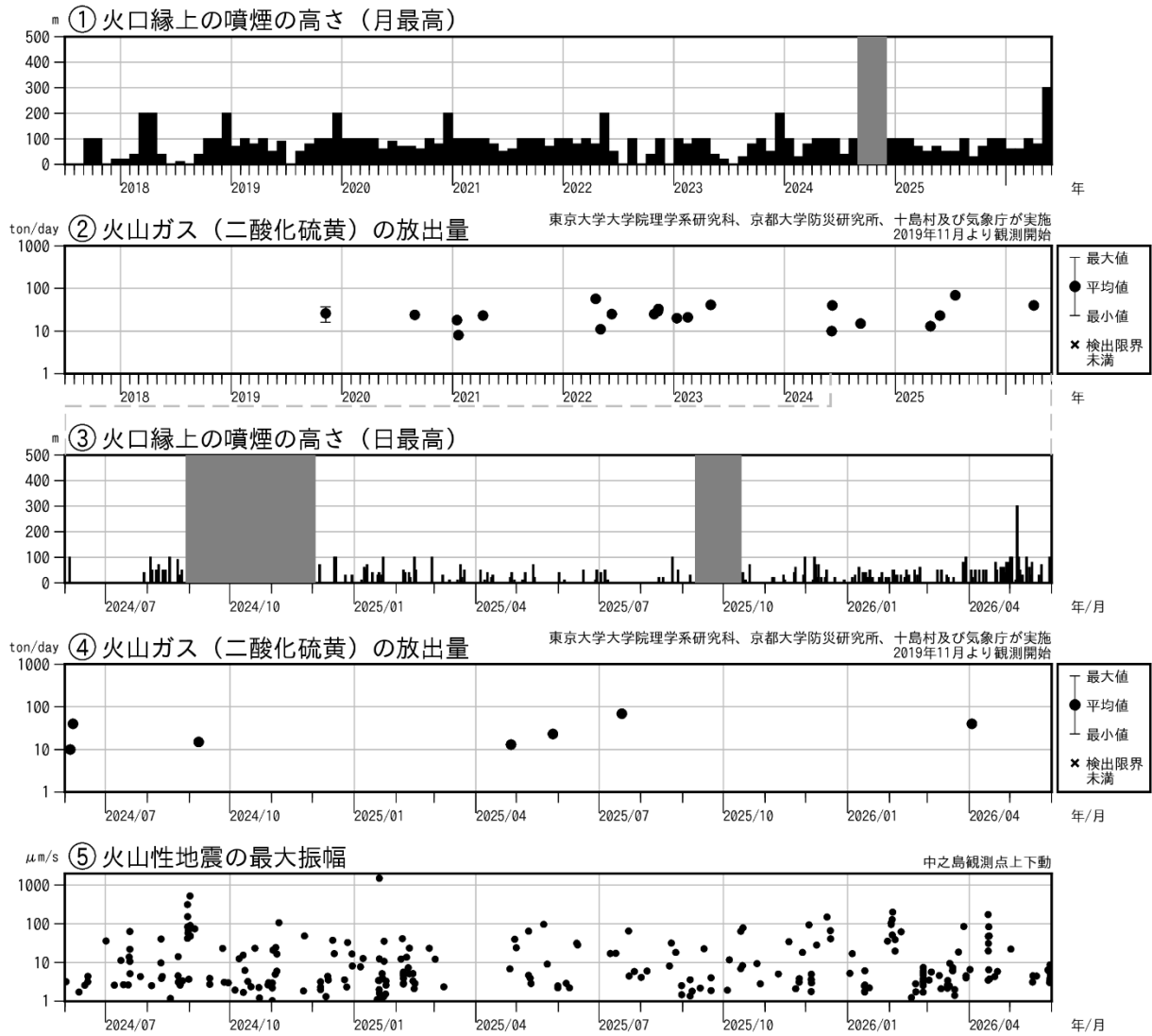


図2 中之島 火山活動経過図（2017年7月～2026年5月）

< 5月の状況 >

- ・御岳火口では白色の噴煙が最高で火口縁上300m（4月：80m）まで上がりました。
- ・火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、今期間、観測値を得られませんでした（4月：40トン）。

灰色部分は監視カメラの障害による欠測を示しています。

2026年3月26日から監視カメラによる噴煙の常時監視を開始しました。2026年3月25日までの噴煙の状況は、毎日08時30分及び14時30分の定時に監視カメラで観測しています。

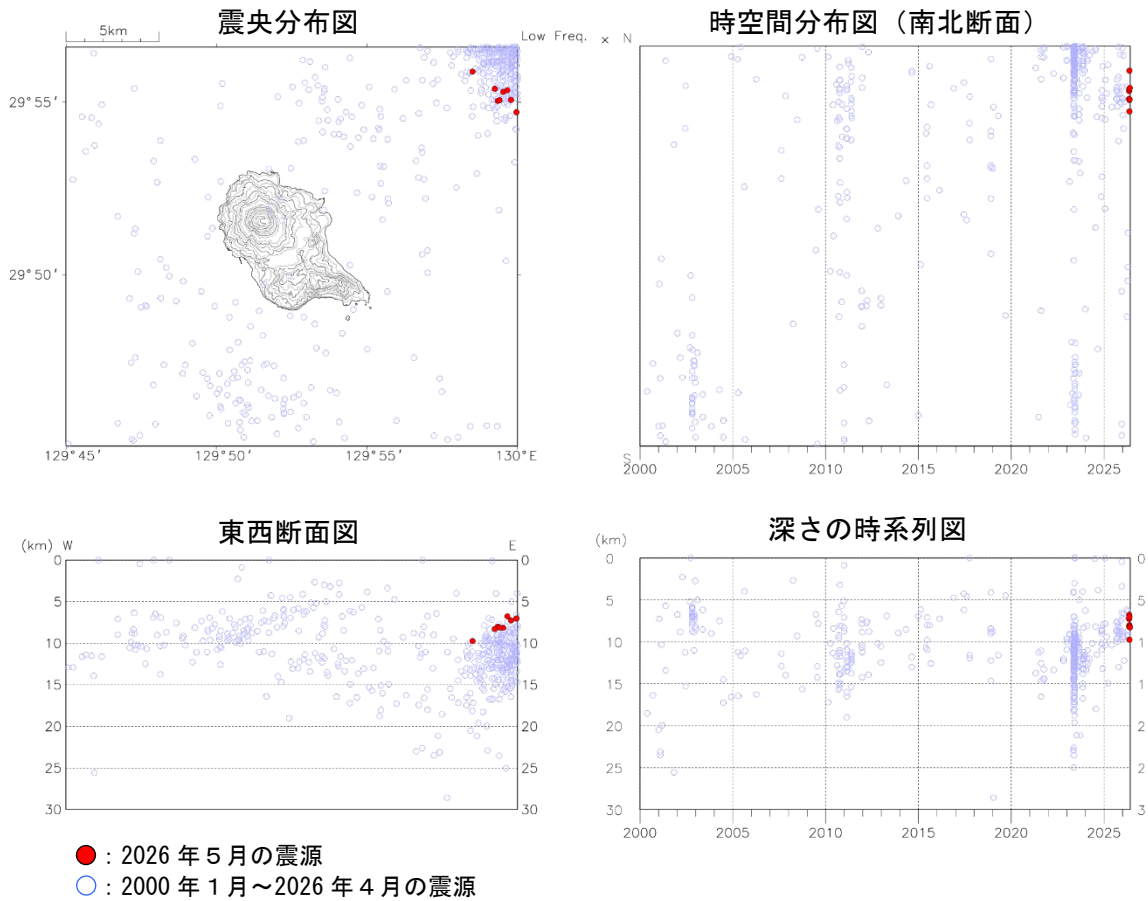


図3 中之島 中之島周辺の震源分布図（2000年1月～2026年5月）

< 5月の状況 >

広域地震観測網において、島内に震源が求まった火山性地震はありませんでした。

広域地震観測網により震源決定したもので、深さは全て海面以下として決定しています。なお、2020年9月以降については、地震観測点の標高を考慮する等、震源決定の手法を変更しております。

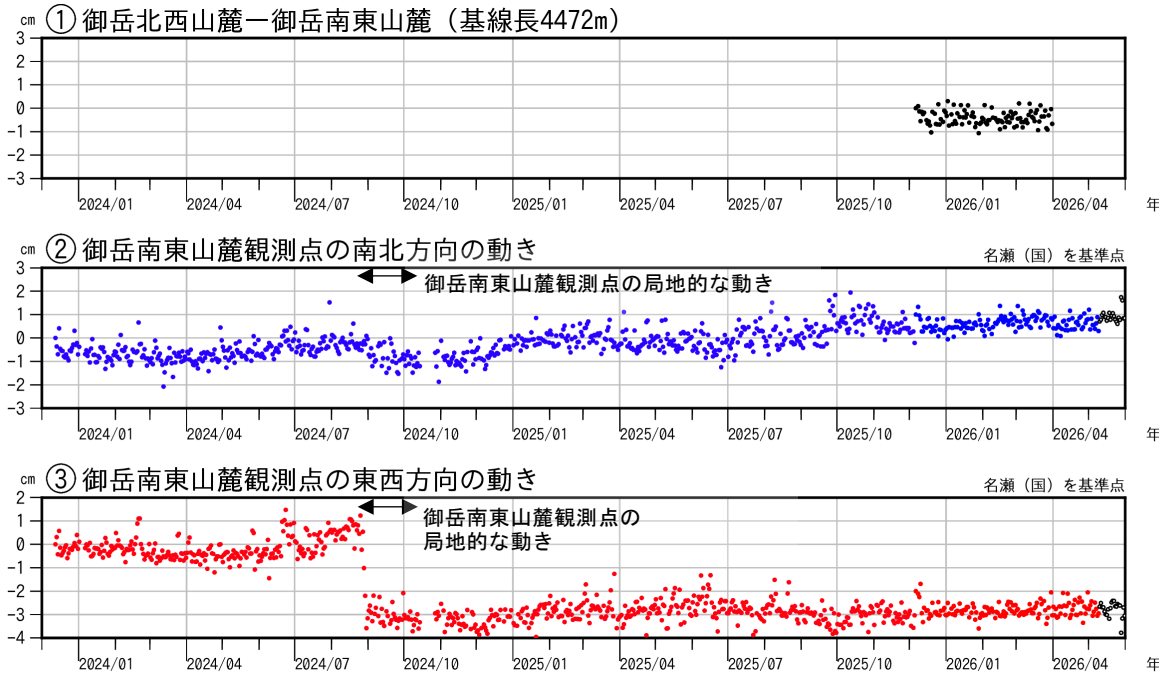


図4 中之島 GNSS連続観測（2023年12月～2026年5月）

GNSS連続観測では、火山活動によると考えられる特段の変化は認められませんでした。

基線は図5の①に対応しています。

基線は島外の観測点（名瀬（国））を基準としています。

直近の白丸は速報的な解析結果であり、再解析により修正されることがあります。

基線の空白部分は欠測を示しています。

2025年12月6日の観測点更新（御岳南東山麓観測点）に伴うステップを補正しています。

（国）：国土地理院

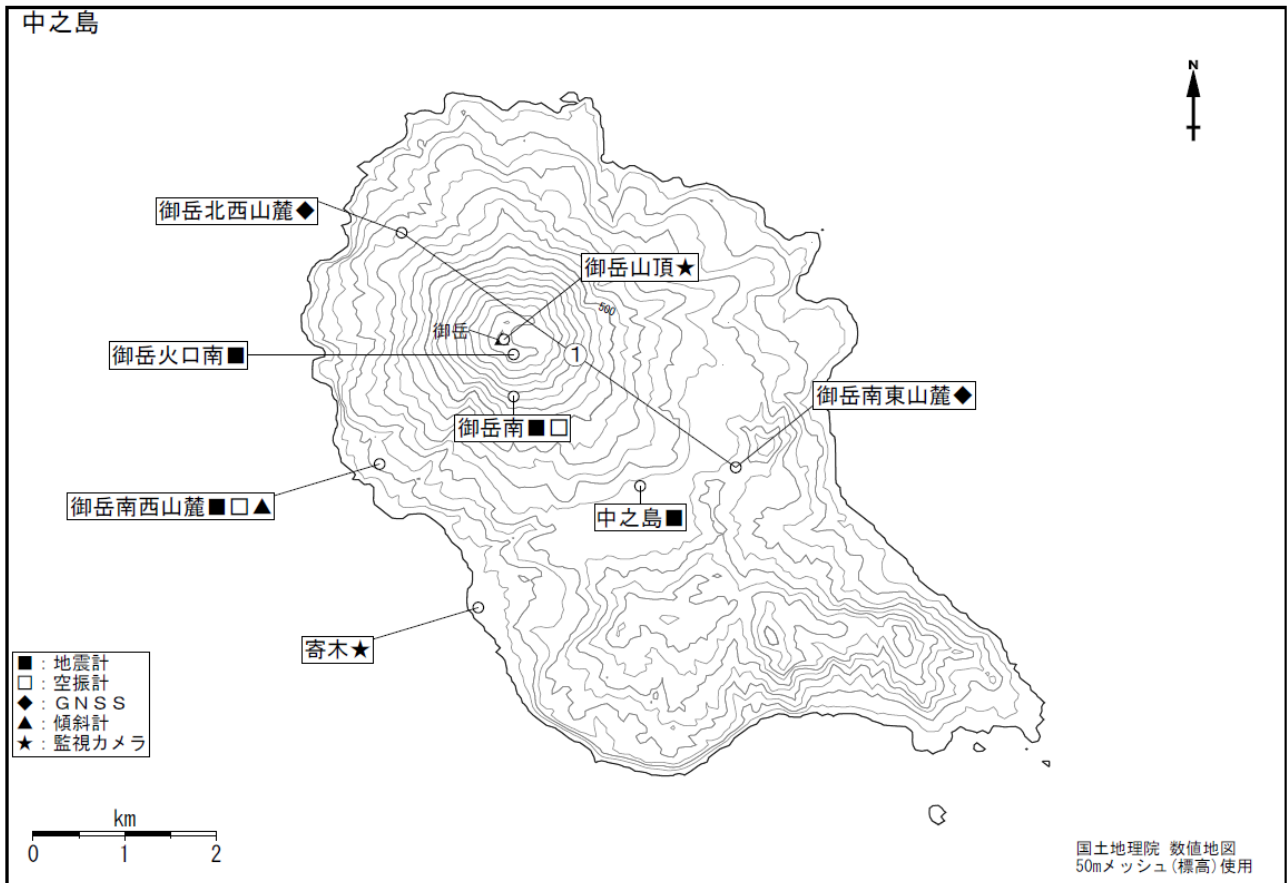


図5 中之島 観測点配置図とGNSS連続観測の基線番号